

福島の子童文学者 35



◆佐藤 久子 さとう・ひさこ（1918～2007）
童話作家。日本児童文学者協会、日本民話の会に所属。手作り絵本の会会長、福島民話の会会長を歴任。

◆小樽に生まれる

1918（大正7）年7月18日、北海道の小樽で海産物問屋を営んでいた両親の間に八人兄弟の末っ子として生まれ、幼少時代を過ごす。7歳の頃に父親が亡くなり一家は故郷である喜多方町（現喜多方市）に戻る。文武両道を兼ね備えた少女だったという。喜多方高等女学校（現喜多方東高等学校）を卒業すると、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に入学、母と共に上京し保育実践科で2年間学ぶ。卒業後は栃木県女子師範学校（現宇都宮大学）附属小学校併設の幼稚園に主任教諭として5年間勤務する。そして福島師範学校（現福島大学）の教員をしていた岡野広市氏（後に佐藤姓へ）との結婚を機に退職して福島市に移り住む。岡野氏は旧制喜多方中学校（現喜多方高等学校）から東京音楽学校（現東京芸術大学）に進み、福島師範学校をはじめ福島大学、福島女子短期大学（現福島学院大学短期大学部）で教鞭をとり、その後は福島県音楽研究会理事長を長年務めるなど、福島県の音楽教育に大きく貢献した人物。

◆童話作家として活躍

幼い頃から、雑誌『赤い鳥』などに親しんでいたが、早くも女学校時代には童話を創作し校友雑誌に発表していたという。その後、師範学校時代に本格的に創作活動に取り組む。そして、1937（昭和12）年、19歳の時に創作した「時計の子供」という作品が『幼児の教育』*1（日本幼稚園協会発行）の第1回フレイベル童話賞の2等に入選する。この賞は絵雑誌『キンダーブック』を発行していたフレイベル館の創業30周年を記念し、幼児教育研究奨励を目的に保育従事者の創作童話を対象に設けられたもので200編近い応募があった。審査員には、童話会の重鎮である小川未明や幼児研究家の倉橋惣三らが名を連ねている。翌年の第2回同賞で「ニコニコダルマさん」が3等、さらに第4回同賞では「逃げない小鳥」で2等入選を果たしている。福島に移ってからも、主婦としてまた4人の母として家庭を守りながら意欲的に童話を創作し、当時人気のあった絵雑誌『コードモノクニ』*2などに投稿している。創作にあたっては詩人で童話作家でもある与田準一に作品を送って指導を仰いでいたという。1946（昭和21）年には、童話絵本『トケイノコドモ』『ポチノオミヤゲ』を文園社より出版する。2冊とも絵まで自ら描いており絵本画家としての才能も発揮された秀作である。（『トケイノコドモ』は、前述の入選作品「時計の子供」から、時代を配慮してか戦争に関する表現を削除し再構成されている）これらの本は、紙も印刷も良いものではなかったが、絵本の発行が少なかった時代に大好評だったという。1947（昭和22）年には、与田準一や関英雄ら童話作家たちにより発足した日本児童文学者協会に入会している。また同じ頃、同郷の詩人羽曾部忠が編集する『童謡教室』や福島の詩人岡登志夫（丘灯至夫）が編集する歌謡誌『蒼空』をはじめ地元紙『福島民報』等につぎつぎに作品を発表している。また、1949（昭和24）年には、同協会の福島支部結成のため尽力し、翌年には児童文学同人誌『芽生え』を発刊。小林金太郎、新開ゆり子、青戸かいち、片平幸三ら福島の児童文学作家たちと批評会や研究会を開くなど切磋琢磨しながら創作活動を行っていた。



『トケイノコドモ』



『ポチノオミヤゲ』



1951（昭和 26）年には、それらの作品をまとめた童話集『花たばをもらったおネコさん』と『ポラン』を発行し第 4 回福島県文学賞に応募する。その後 1954（昭和 29）年に「ギンのはなし」で第 6 回同賞民報奨励賞を、翌年には「盗み」で第 7 回同賞準賞を、翌々年「おばあちゃん」で第 8 回同賞正賞を受賞する。また、この頃、児童文学者協会編集の童話集『ねずみのまち』（川流堂書房）、『学年別童話の国』（実業之日本社）、『幼年童話 12 か月』（牧書店）をはじめ、『こどものくに名作選』（国民図書刊行会）に作品が掲載されている。これらの童話集には、小川未明、坪田譲治、浜田廣介、奈街三郎などの錚々たる童話作家が名を連ねており、その中で新進の童話作家として熱き思いを胸に創作に取り組んでいた佐藤氏の姿が想像される。その後も同人誌で作品を発表するなどの創作活動を続け、多くの作品を残している。

◆福島の児童文化活動発展のために

童話作家としての活動の傍ら、1980（昭和 55）年から、「福島子どもの本をひろめる会」の顧問として勉強会の講師等を務めている。「福島民話の会」の会長としても活躍、福島が誇る民話の語り部遠藤登志子氏と共に全国で福島の民話の良さをひろめる活動を行っている。また、「福島手作り絵本の会」の会長として県内各地で展示会を開催し手作り絵本の啓蒙活動を行っている。そのほか、福島女子短期大学（現福島学院大学短期大学部）で児童文学の講座を担当していたこともある。



◆切り絵作家として

1989（平成元）年以降は、切り絵の制作に取り組み多くの作品を残している。女学校時代の同級生は「ずば抜けて絵のうまかった方で、暇を見つけては花壇や校庭で余念無く絵筆を走らせていた」と語っており、また自らも「美術学校に進学したかった」というその才能が見事に花開き、「色と遊ぶ切り絵」展として何度も発表している。（左の写真は、幼少時代を小樽で過ごしたことから大好きになったという海と船の作品）

◆近代童話の香りを

佐藤氏が童話を創作していた時代は、近代童話から現代童話へと移行期であり、あこがれていた小川未明の童話が批判された時期でもある。後期には時流にあわせた作品にも挑戦しているが、初期の作品には近代童話の香りが漂う。母親の帰りを待ちわびてむずかりはじめた弟に母親の浴衣の柄模様を一つずつ数えるという「おかあさんの浴衣」や、鮎の想いを詩情豊かに描いた「ギンのはなし」など、生き生きとした子どもの姿を描いているもの、生きる物へのおもいやりとあたたかい眼差しを感じさせてくれるものが多い。そして時にユーモラスで、時に不思議な世界へ導く。それらの作品の数々はどれも絵を描くように書かれた詩情豊かな心地よい味わいである。

*¹ 『幼児の教育』は、明治創刊以来現在まで続いている我が国最古の幼児教育研究誌。日本で最初に設立され、日本幼児教育の基盤を築いた教育研究機関であるお茶の水女子大学と深い関連がある。

*² 『コドモノクニ』は、大正後期から昭和初期にかけて幼児・児童を対象に出された戦前を代表する芸術絵雑誌。絵画主任として岡本帰一、顧問には倉橋惣三、北原白秋や童謡詩人野口雨情らが名を連ねた。日本の幼年雑誌の発展に革新的な役割を果たす。小川未明らの『赤い鳥』系列におかれ、数々の作品を生み出し童話作家や詩人、画家を育てた。

【参考】

『日本児童文学大事典』（大阪国際児童文学館）

『福島大百科事典』（福島民報社）

『福島子どもの本をひろめる会々報』（同会発行）ほか

〈児童資料チーム 大崎真希子〉

佐藤久子氏著作一覧 童話・児童文学を中心にまとめた。(平成22年3月31日現在確認分)

西暦(和暦)	年齢	作品名 「作品名の前の数字は作品番号、下線は改題または改訂版等」。(ジャンル), ※は備考等の順で表記	掲載誌および収録本
1931(昭6)	13歳	1「初秋」(不明)	喜多方高等女学校『校友会誌』創刊号
1937(昭12)	19歳	2「時計の子供」※第1回フレーベル賞幼年童話2等	『幼児の教育』第37巻9月号、第8・9号 日本幼稚園協会発行
1938(昭13)	20歳	3「ニコニコダルマさん」※同賞3等	〃 第38巻6月号、第6号
1940(昭15)	22歳	4「逃げない小鳥」※同賞2等	〃 第40巻7月号、第7号
1941(昭16)	23歳	5「おかあさんの浴衣」	『コドモノクニ』第20巻9号、 昭和16年9月号
1943(昭18)	25歳	6「コガニノハサミ」	〃 第22巻2号、 昭和18年2月号
1946(昭21)	28歳	「トケイノコドモ」※2修正加筆	『童話絵本トケイノコドモ』文園社 絵と文
		7「ポチノオミヤゲ」	『童話絵本ポチノオミヤゲ』文園社 絵と文
		8「ゆうがた」、9「エントツ」、10「クリスマス」 (3作品とも童謡)	『童謡教室』3, 4, 5号 羽曾部忠編(北会津郡川南村)
1947(昭22)	29歳	11「やさしい心の光り」12「コンペイトウ」13「坊や」 (2作品童謡), 14「芝」(童謡)	〃 6, 8号
		15「私の赤ちゃん」16「かまどの焚火」、17「雨ふり」、 18「赤い靴下」(4作品とも童謡)	『蒼空』12号5月号、13号6月号、16号9月号、 18号11月号 岡登志夫編 蒼空詩社
		19「赤いきしゃばっば」(童謡)	『日本のこども』第11巻第12号 大橋貞雄編集 国民図書刊行会
		20「太鼓台」	『福島民報』(7月29日付)
1948(昭23)	30歳	21「たばこのけむり」	『ねずみの町』児童文学者協会編 川流堂書房
1949(昭24)	31歳	「ニコニコダルマさん」※3の脚本化	『世紀の教育』第1巻第2号 学芸会号 福島県教員組合
1950(昭25)	32歳	※この頃、福島児童文学研究会 同人誌『芽生え』『メルヘン』作品を発表。(作品名確認できず)	
1951(昭26)	33歳	22「河原」	『福島民友』「県下の童謡・童話作家めぐり」 (1月24日付)
		23「花たばをもらったおネコさん」24「はるになった」 25「赤いボタン」26「金太郎さんのおもちつき」27 「にいさんのびょうき」28「やぎと赤いおはじき」29 「よなかのお話」30「お日さまのところまで」31「ふ うりさんのうた」32「雨の日」33「ゆうがたのど て」34「かさ」35「どぶねずみのおよめさん」36 「赤ちゃんのくびまき」37「リンゴ」38「おおきな 手」39「きんぎょ」(他に5, 6, 11収録)	童話集『花たばをもらったおネコさん』 自費出版 ※第4回福島県文学賞に応募
		40「クモの兄弟」41「花の帽子」42「お月さまと赤い 靴」43「白い犬」44「ポラン」45「小鳥と子供たち」 46「野菊」47「想いでの國へ」48「にのさん」49 「やんま」50「ヒモの話」51「サーカスの犬」(他に 20, 21, 22, 38収録)	童話集『ポラン』 自費出版 ※第4回県文学賞に応募
		「バロン物語」(劇脚本)※51	佐藤久子原作 岩間芳樹脚色 福島放送子供会 (昭和26年8月22日放送用台本)
1952(昭27)	34歳	「やぎとあかいおはじき」※28	『小学生どうわ1ねん』船木枳郎、奈街三郎、 関英雄編 寶文館
1953(昭28)	35歳	52「二人の小人」(劇脚本)	福島放送局放送部 (昭和28年1月28日放送用台本)
		53「ギンのはなし」※第6回福島県文学賞民報奨励賞	『県文学集』昭和28年版 福島県教育委員会事務局
1954(昭29)	36歳	「雨の日」※32	『学年別童話の国 2年生』児童文学者協会編 実業之日本社
1955(昭30)	37歳	54「盗み」※第7回福島県文学賞準賞	『県文学集』昭和29年版 福島県教育委員会事務局
		「大きな手」※38	『幼年童話12か月 第6巻』児童文学者協会編 牧書店
1956(昭31)	38歳	55「おばあちゃん」(小説)※第8回福島県文学賞正賞	『県文学集』昭和30年版 福島県教育委員会事務局

西暦(和暦)	年齢	作品名	掲載誌および収録本
1957(昭32)	39歳	「こがにのはさみ」※6	『こどものくに名作選 銀の巻 2ねん』 佐藤義美、与田準一等編 国民図書刊行会
		56「百ペン」	『日本児童文学』3巻9号 児童文学者協会
		57「ミルクの川」58「くつ下」	『豊かな暮らし』第1巻(号数不明) 豊かな暮らし編集部 福島ミルクプラント
1958(昭33)	40歳	59「ペス」、60「おひなさま」、61「猿とび佐助」、62「みんなといっしょ」、63「十円の鏡」、64「箱庭」、65「金賞」、66「まちのオルゴール」、67「にんじんさんと、じゃがいもさんのお話」、68「プラタナスの落ち葉」	『豊かな暮らし』第2巻2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12号
1959(昭34)	41歳	69「いのししと自動車」、70「ねずみの市長さん」、71「小川に春が」、72「カラスの会議」、「※28」、73「雨」、74「川岸」、75「大工さんとピアノ」、76「運動会」、77「マミちゃんとタロのお話」、78「コマ」	〃 第3巻1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12号
		「きんぎょ」※39 「ふうりんさんのうた」※31	『幼年童話』創刊号 奈街三郎編 幼年童話会
1960(昭35)	42歳	79「赤い石」	〃 (号数不明)
		80「長いすのおじいさん」	『日本児童文学』6巻2号 児童文学者協会
		81「町からきたミミコ」、82「お山のスター」、83「モグラのグラーはピアニスト」、84「本代」、85「野原のマーケット」、86「みつばちの国」、87「ちから」、88「虫の声」、89「スカート」、90「クーじいさんとキックの話」	第4巻1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 12号
1961(昭36)	43歳	91「さくら草」	〃 第5巻4号
1967(昭42)	49歳	「ばばちゃん」※55	『ばばちゃん』福島県図書教材株式会社
1969(昭44)	51歳	92「トン平ちゃんのダンス」93「三びきの子ぎつね」94「動物村の病院」95「モウ太君はサラリーマン」96「なき虫さん」97「おかあさんの初ぶたい」98「けがをしたアリ吉とアリ平」99「はちの学芸会」100「かたつむりのおじいさん」101「山ゆきのバス」102「ひとりぼっちのモクスケ」103「ベラの長靴」104「のみの運動会」105「春風のふく日」106「チュン助は卒業しました」107「にじからもらった色」108「さみしがりやのもいちおじいさん」109「オリオン」110「二つの茶わん」111「くらい部屋」112「コウイチのかあちゃん」113「お手伝いのしづちゃん」(他5, 6, 28, 31, 35, 36, 37, 39, 41, 43, 44, 48, 56, 57, 61, 65, 67, 68, 69, 70, 72, 74, 78, 80, 81, 82, 83, 85, 87, 88, 89で53話)	『にじからもらった色』佐藤久子童話集 表紙・挿絵佐藤広樹 福島県図書教材株式会社
		「アリ吉とアリ平」※98	『お話の森7・8月』児童文学者協会編 牧書店
1971(昭46)	53歳	114「小さいかべやさん」	『月夜のバス』子どもの文学傑作編 初級2 松谷みよこ、宮川ひろ、谷川俊太郎等著 偕成社
1972(昭47)	54歳	115「ポピーおやすみなさい」(※長男の闘病記)	『ポピーおやすみなさい』福島県図書教材株式会社
1980(昭55)	62歳	116「ホームランきつと打てるよ」、117「あかねこどん 遠藤登志子より」(民話) 118「パパみたいだったね」	『山彦』7号, 8号 福島児童文学研究会 日本児童文学者協会福島支部
1981(昭56)	63歳	119「かに売りのおじいさん」	〃 9号
		120「おしげさん」	『イヌさんのひとりあるき』 福島県福祉童話集刊行委員会
1982(昭57)	64歳	121「おばあさんのはこ」※中に101	『おばあさんのはこ』自費出版
		122「ピンクのコップ」	『山彦』10号
1983(昭58)	65歳	123「トモコのうちに赤ちゃんが来た」	〃 11号
1984(昭59)	66歳	124「カー子の帽子」	〃 12号
1985(昭60)	67歳	125「キツネの母さんポロンと泣いたよ」	〃 13号
1986(昭61)	68歳	126「ケンちゃんのでめ金魚」	〃 14号